SHIEN アカデミー Press

Vol.14　SHIEN学の新しい時代へ

INDEX

- 代表理事からのメッセージ　意識を変える、それがSHIEN学……P1
- SHIEN学アドバイザー　＜私たちの他己紹介＞
  髙木　和歌（SHIEN学アドバイザー）・赤澤輝美（SHIEN学アドバイザー）……P2～P3
- SHIENアカデミー活動報告（１）SHIENアカデミー福岡、SHIENアカデミー長崎……P4
- SHIENアカデミー活動報告（２）日本・スウェーデン外交関係樹立１５０周年記念イベント）
  伊藤　めぐ（SHIEN学マスター）……P5
- 今後の予定（３つのコースとセミナー）……P6
- SHIEN学と私の出会い（シリーズ ２）初代牧之原市長　西原　茂樹　氏……P7～P9

意識を変える、それがSHIEN学

SHIENアカデミー代表理事　たておか やすを

先日国連大学のウータント会議場で縁ある人たちと講演を聴いたのですが、米国では４００億円の赤字を出した役員たちが、４００億円のリストラを従業員に強いて、効率化に成功します。すると、その年の役員たちがボーナスを２００億円もとるそうです。日本ではちょっとありえないでしょう。また、１００億円の利益を出したとすると、２００億円銀行から借りて、それを加えて株主に配当するそうです。そして、従業員をモチベーションするとは、給料を上げるか、ポジションを挙げるくらいしか発想が浮かばないそうです。しかし、日本では、トップが従業員と現場で一緒に働くということは決して特別なことではないと語っていました。

米国人から見れば、なぜ日本人が同じようにしないのか、分かりません。日本人は米国の経営の仕方も日本とそんなに変わらないと思いこんでいることでしょうが、まったく違うわけです。このように狩猟的というか、競争的というあり方は、一部の地域、一部の文化、一時的にはありえるのでしょうが、格差の拡大、不幸のもとに幸福者がでるというあり方は哲学的にも少し考えが深い人なら、何を意味しているのか、将来的に地球をどうしてしまうのかよくお分かりになるでしょう。

重なりを創って、互いのことを想いながら、してもらう／してあげながら、天分を引き出し合っていくあり方が理想的であり、持続可能な社会を導いていくのです。そこになかなかいたれないのは、過去のリザルトパラダイムの経験、価値感が染み付いており、その実践の残滓が濃厚に私たちを取り囲んでいるからです。勝敗的な刺激を好むような刺激を無責任に、そうとはしらずに発信したり、無意識に受け入れあっているからといえましょう。温かな意識に変える時が来ているのです。教育も経済も政治も医学もそのように変えていくのが、意識の科学、SHIEN学なのです。

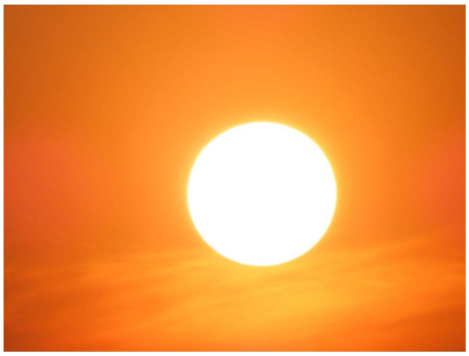


photo by Yasuwo

SHIEN学アドバイザー ＜私たちの他己紹介＞

髙木　和歌（SHIEN学アドバイザー）

赤澤　輝美（SHIEN学アドバイザー）

輝美さん → 和歌さん

和歌さんは水の都島原の雲仙普賢岳を中心にした半島で湧水が町のあちらこちらに流れ、山や海に囲まれた自然の多い城下町の長崎県島原生まれの島原育ちでいつも湧水に触れていたそうです。一時は島原を離れて東京で進学や就職、結婚、起業、離婚を経験して島原に戻られました。そして、大切なものがふるさと島原にあったことに気づかれたそうです。

会社へ就職し、20代後半でカラーセラピーと出会ったことで内側と向き合うこと、温かなハートの言語を知り救われたそうです。

今では独特の感性で和歌さんのカラーワールドを展開されています。そのカラーワールドは、内側＝心を癒す、こと。そして、そこから、カウンセリングの仕事を始めるきっかけになったそうです。ソウル・ブラッサムという屋号で＜あなたのお花を咲かせるお手伝いをしたい＞という強い想いでカウンセリングや講座、イベント主催などを20年という長い月日されています。

一年前、ソウル・ブラッサムを「学校みたいにしたいな…」と話されていたことが今秋に実現し、SHIENアカデミー長崎が開校になりました。和歌さんがよく話すのは「世直しをしたい」と、子どもの頃から漠然と思っていたそうです。その「世直し」がカウンセリングでありSHIENなのでしょう。和歌さんの声や話し方は人を惹きつけ、司会やファシリテーター、講師と言ったものは正に天分でされているのですね。順序立てられていて本当にわかりやすいのです。

・SHIEN学との出会い

2016年12月カラーセラピーのご縁により、北海道の小西温子さんの生命の樹の講座を受講する中で、「SHIEN」になんだか惹かれ、小西先生のつくられる場がSHIEN学からのものであることから興味を持たれたそうです。

・SHIEN学アドバイザー資格を目指して

長崎でSHIEN１Dayセミナーを開催したいという強い想いで、SHIEN学マスターの伊藤めぐさんをお呼びし、2018年３月21日春分の日に開催。その強い想いは北海道で感じたSHIENの素晴らしさを九州の方にもぜひ体験してもらいたいと熱く語っていました。それは、認定試験も兼ねていました。その前日はプレゼン資料を夜遅くまで作成されていたのを思い出します。

参加者は13名で前半は和歌さんの認定試験でありSHIEN学の説明と相談会、後半はめぐさんのお話という流れで場所は島原の古民家サロンの二階で行いました。そこは心地よい場となり、和歌さんの大切なふるさと島原でご先祖様から受け継がれている場所。このときからソウル・ブラッサムではSHIENアカデミー長崎への流れは出来上がっていたのだと私は思います。

次ページへ続く▼

私たちの他己紹介

▼前ページよりつづく

・これからのSHIEN学の実践について

SHIENアカデミー長崎が10月27日に開講となり、定期的なSHIEN学を深く学ぶ３種類のコースや天分発見ワークショップ、SHIEN相談会の定期開催などの運営を行う予定だそうです。そして、いろんな地域でもSHIEN学に関わっていかれるそうです。

和歌さんはSHIENミーティングが大好きで、本当に平和な話し合いの場。様々な分野でSHIENのエッセンスを実践する方が少しずつでも増えていくこと、たくさんの方や地域の力をお借りしてわくわくしながらご縁を紡いでいきたいそうです。

和歌さん → 輝美さん

てるみんこと赤澤輝美さんを紹介します。てるみんは銀行で32年間務められ、支店長も経験されたというなかなか豪快な女性です。結婚・出産・離婚も経験し、現在は娘さんお一人とわんこ三匹と暮らしていらっしゃいます。金融業界は男尊女卑でリザパラの世界だったようで、２０代後半までは、リザパラで仕事をこなしていらっしゃったようです。３０代になると何かが違うと疑問を持ち始め、管理職になったころからは個人の個性を活かした仕事の分担をしていくようになっていました。

退職してからは、「これです！」と絞れなくいろいろとやっていますが、ずっとできなかったことに挑戦している最中とのこと。もともと音楽が大好きで音大を目指していたとのことで、今のてるみんは音楽に舞に、神社巡りに、山や海で楽しみ、美味しいものをたくさん食べ、興味のあった美容業界の糸エステを始めたり、パソコン作業はプロ級だったり、それはそれは賑やかで多彩な女性です。SHIENアカデミーでは任せて安心！天分の会計を担当されています。

・SHIEN学との出会い

きっかけは、私も同じですが、生命の樹研究家の小西温子さんのお話で「世界を変えるSHIEN学」を読み、そこには組織を変えるためにぼんやりとしていたものがあったそうです。そして2017年２月に札幌Cafe toneでSHIENセミナーを受講。天分発見ワークショップが関西で開催されたことで３回続けて受講し、SHIENアカデミーへの参加は札幌へと飛びました。あれよあれよと2018年４月にアドバイザーになられました！

・SHIEN学アドバイザー資格を目指して

てるみんによると、私がアドバイザー資格取得のタイミングを決めたようです。2017年12月に３回目のSHIENアカデミーを受講して後、すぐにアドバイザー資格を取ることは考えてなかったのですが…なぜか実技試験の日程が和歌さんに決められた？みたいな。気づいたらアドバイザーになっていました。ファシリテーターには苦手意識があり、裏方で動く方が好きなので、資格は先伸ばしするか取らない？と目論んでいたのです。しかしながら、そこを見透かされたのか知らない間に？和歌さんが日程を決めていた（‘◇’）ゞ Space auwaでのSHIEN相談会が実技試験になり、焦り焦りの告知でありましたが開催することができました。和歌さんが日程を決めてくれたことで、資格を取ることができました。和歌さんのおかげです(^^♪」とのこと。

よかったです。決して見透かしていません（笑）金融業界で頑張ってきたてるみんが伝えてくれるパラダイムシフトは必見なんです。

・これからのSHIEN学の実践について―

SHIEN学を通じ、ご縁がたくさん繋がり、温かな安心な場があるということで、素の自分でいいと思えることで徐々に自己肯定できるようになってこられたようです。私はたくさん助けてもらっています。私だけでなくたくさんの方が、助けてもらっています。人への愛情に溢れ、惜しみなく自分の力を捧げる方です。居てくださると安心してみんなが天分を発揮することができます。

ご自身にとっては難関(笑)の「してもらう」に慣れながら、自分の生活に取り入れながら実感を味わいながら、周りに広がるようにしていきたいとのこと。。天分が違うからこそ活かし合うことができる。対としてお互いに天分を出し合いながら、Space auwaとソウル・ブラッサムが関西と九州でSHIEN学に触れることができる場として共に育っていきますように。てるみんこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

SHIENアカデミー福岡 / SHIENアカデミー長崎が、誕生いたしました(*´▽`)ﾉｼ ♬♪♩

九州の地に　SHIEN学の「学びと気づきの場」が立ち上がりました(○´∀`)ﾉ

SHIENアカデミー福岡立ち上げ セミナーの様子(*´▽`)ﾉｼ ♬♪♩

SHIENアカデミー長崎立ち上げ 講座の様子(*´▽`)ﾉｼ ♬♪♩

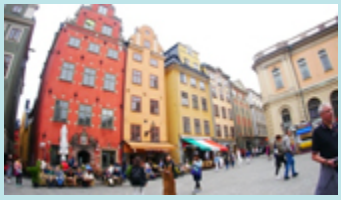
SHIENカフェ@全国へ～(*´▽`)ﾉｼ ♬♪♩

北海道キャンパスを中心に
毎月１回SHIENカフェを開催してたSHIENカフェですが
SHIENアカデミー福岡と**SHIENアカデミー長崎**が誕生し、
福岡、長崎、大阪、東京北海道と会場が 増えました.
スカイプ経由で全国からご参加いただけます。 ぜひ！ご来場お待ちしています。
SHIENカフェの日程はFacebookのSHIEN学 / 公式ページにて
https://www.facebook.com/shiengaku/

アカデミー活動レポート（2）

2018年9月6日スウェーデンにてSHIEN学が・・・^^///

日本・スウェーデン外交関係樹立150周年記念イベントにて舘岡康雄先生が基調講演を、伊藤めぐマスターがワークショップをされて来ました。
たくさんの方が関わり、温かな場が立ち上がりました



スウェーデンでSHIEN学を体験された みなさんの感想

・他者の問題を聴いたり、アドバイスすることはとてもよいことである。
・他の人をサポートするだけでなく、サポートを貰うということはとても重要である。
・人からサポートもらえるようになることをもっと学びたい。
・ありがとう。このレクチャーはとても楽しかった。
・以前考えていたより、わたしの周りの人々はもっと助けてくれうるということがいまや理解できた。
・人を助けるとき、自分も救われる。
・たのしかったし、たくさんのことが学べたと感じる。
・もっと 助けをもとめるべきだと 思った。
・もっとシェアしたい。

北海道大学ヘルシンキオフィイスのこーずぱらだいむ

９日の日は当初、ヘルシンキ大学のO先生と一行は逢う予定でした。
しかし、日本出発前に先方のご家族の都合でキャンセル。どういうことかなと思いをめぐらしていたそうです。すると、偶然にも北海道札幌在住のH氏がフィンランドにおり、めぐマスターとつながり、急遽ヘルシンキで会合、その後、ヘルシンキオフィイスの所長とも逢うことになり、ロシア情勢など交換されたそうです。そして、北欧SHIENアカデミーオフイスの話まで発展しました。まぁ、不思議ですね。

SHIEN学「SHIEN学を深く学ぶ3つのコース」 ・セミナーのご案内

SHIEN学をさまざまなスタイルで学び、活躍していただくために、これまでの「ファシリテーション（アドバイザー・マスター）コース」に加え、**SHIEN学「SHIEN学を深く学ぶ3つのコース」** として 「プラクティショナーコース」「シンポジウムコース」を新設しました。 各コースは次のような内容です。

コース名	内容	コース構成	開催日
ファシリテーションコース	有償でSHIEN学の講演、ワークショップを実施したい人向け。SHIEN学アドバイザー、SHIEN学マスターの資格取得ができます。	基礎編、応用編、実践編	年9回予定（北海道/関東 関西/ 九州）
プラクティショナーコース	SHIEN学を自分の生活に取り入れて実践し、生活の質を上げたい人向け。有償講演等はできませんが、SHIEN学をより深めたい方に最適なコースです。	基礎編、応用編	年9回予定（北海道/関東 関西/ 九州）
シンポジウムコース	二人以上のコース修了者で有償・無償のSHIEN学に関わるイベント開催が可能です。イベント実施にあたってのシナリオをアカデミーよりご提供します。	基礎編、応用編、実践編	年9回予定（北海道/関東 関西/ 九州）

●2018年～2019年度の開催日程

日程	地域	開催講座	会場	申込
11月17日（土）	札幌	アドバイザー(資格) プラクティショナー シンポジウム	札幌 Café tone 札幌市北区北23条西10丁目1-6	受付中
11月18日（日）	札幌	SHIEN学 １日セミナー in 札幌	札幌 Café tone 札幌市北区北23条西10丁目1-6 前売り 7,700円 / 当日 8,500円	受付中
12月15,16日（土・日）	長崎/島原	天分発見ワークショップ1,2,3	Soul Blossom 長崎県島原市弁天町1-7055-1）	受付中
12月17日（月）	熊本	SHIEN学 セミナー in 熊本	調整中です^^//	受付中
1月12日（土）	東京	アドバイザー(資格) プラクティショナー シンポジウム	会場◇ S/S/A/W（カフェ・レストラン） 住所◇東京都 品川区 荏原 5-15-15 西小山サマリヤマンション 1F	受付中
1月13日（日）	東京	マスター講座	会場◇ S/S/A/W（カフェ・レストラン） 住所◇東京都 品川区 荏原 5-15-15 西小山サマリヤマンション 1F	公募してません
2月16日（土）	長崎/島原	アドバイザー(資格) プラクティショナー シンポジウム	Soul Blossom 長崎県島原市弁天町1-7055-1）	受付中

2018年12月9日（日）第14回 shien（シエン）学会フォーラムが
東京工業大学キャンパスイノベーションセンターにて開催されます。
詳しい内容は https://www.facebook.com/events/714586475565303/ にて

SHIEN学と私の出会い
（シリーズ２）

初代牧之原市長 西原　茂樹

前回まで
県議会議員選挙の激戦から「人は誰でも主役になれる」「市民が主役になってやる気になってまちづくりに取り組んでもらう」ことの大切さを実感された西原さん、県議会議員４期を経て、合併で誕生した初代牧之原市長に就任されます。今回は、市長となって市民との対話を模索されていた頃のお話しです。SHIEN学との出会いがありました。

牧之原市流対話の場作り

2005年11月、私は市長に就任してすぐにフォーラム牧之原を立ち上げました。市民の皆さんと一緒になって市民協働のまちづくりをやろうとしました。市民は多様で市の職員よりの専門的な分野で抜きん出る方々がたくさんいます。そんな皆さんに協力してもらうことにしました。

「市民のための市役所」と模造紙に大書きした標語を掲げ、「さあ！市民の皆さん、市役所においでください。」と宣言しました。

「会場は市役所の会議室を使ってください。司会は職員が勤めますし、資料も用意します」という触れ込みでフォーラム牧之原には１００人以上の市民が集まってくれました。教育、環境、福祉、子育て、そんな分野別に７つのグループができて話し合いが始まりました。しかし何回か進むうちに、だんだん人数が減ってきました。理由を調べると「一人だけ話している」「相手を頭から否定する」「楽しくない」と、だんだん参加者が減っていきました。どこにでもありがちな理由ですが、それを見て職員は「市民には無理だよ。職員に任せればいい」と、議会も「市長は市民に決めさせようとしている。議会があるんだ。市民がやるなんて無理に決まっている」と市長の失敗を陰で笑っていました。

ちょうど市長２年目が始まって時期で、市長のマニフェストの検証や自治基本条例の検討など市民の声を聞こうと考えました。その際に、会議のやり方について研修をすることになりました。

「会議ファシリテーター普及協会」の釘山さんに研修をお願いしました。その時に「会議って何ですか？」と、聞かれて私は「話し合って決める場です」と答えました。たぶんほとんどの人がそう答えるでしょう。しかし彼は「違います。聴く場です」と答えました。その後の研修や実践を積む中でそのことがはっきりしてきました。こちらの話を聴いてほしいと思っても人は聞いてくれません。それは関心がないからです。どんな時に関心があるかというと、「問い」をした時です。自分が疑問に思ったり、不安だったり、真剣に問いを考えて質問した時にはしっかり「聴く」状態になります。

会議を「相手の意見を聴く場」するならば「問い」が出しやすい、質問のしやすい環境と進行が大切になります。この進行役をファシリテーターと言い、ファシリテーターによって進行する場をファシリテーションと言います。つまり、会議はこの段階では「意見を出し合って聴きあう場」でしかありません。それで良いのでしょうか。多くの人は疑問に思うと思いますが、実はそのプロセスがとても結論を出していく場合に必要です。特に集団の参加者に協力をしてもらう、あるいは負担を強いる場合には特に重要です。

人は行動を起こす場合、理由が必要です。法律や条令やルールがあれば、やむ終えなくそのとおりに行動します。しかし、多くの場合「学んで、気づいて、更に共感し」のプロセスが必要です。これが「対話の場」と考えれば良いと思います。その場をいかに素敵な場にしていくかがこれからの行政もビジネスも重要となるでしょう。

牧之原市では、様々な場面でこのファシリテーションを活用しています。特徴は、専門家ではなく様

次ページへ続く▼

SHIEN学と私の出会い
（シリーズ２）

▼前ページより続く

々な会場で活躍しているのは市民ファシリテーターです。当初の理由は、専門家に頼むと高額な講師料が必要でたくさんの会議で使えない！でした。もちろん費用面は別にしても、市民が進行役をやると参加者の意識が変わります。市民ボランティアさんが市政のことに関して行政と市民の間に立ってやっていたら参加者だって協力してくれます。

牧之原市の場合には、全部ではありませんが多くの場合会議の主催者が自治会など市民側の場合もあります。それに行政職員が参加します。ルールを決めてあります。ワークショップ会議（牧之原市では男女協働サロンと呼びます)は「一人だけ話さない」「頭から否定しない」「楽しい雰囲気で」進めます。会場には、音楽が流れ、楽しい飾りつけもありますが、必ずお菓子やお茶も用意されます。楽しい場の演出必需品です。サロンが始まるとアイスブレイクと言って場を和ませるゲームをやる場合があります。その担当が好きといったファシリテーターもいます。最近では会議の内容をグラフィックで描いていくグラフィックファシリテータ（グラフィッカー）も誕生して活躍しています。

このように、様々な人たちが、自分の好きな分野で活躍し、参加した市民や職員は楽しい雰囲気で本音の問答を繰り返していきます。この「聴きあう」姿の中にこそそれぞれの解決の「気づき」や「芽生え」が生まれてきます。一方的に説明したり、相手を一方的に批判したりしていては何も生まれてきません。対話の場、つまり聴きあう場にこそ大きなパワーが潜んでいます。

この手法で牧之原市は、自治基本条例、津波防災まちづくり、公共施設マネジメント、浜岡原発とエネルギー、そして最近では地域リーダー育成事業と言った様々なプロジェクトを成功させています。特に、これらの一連の事業の中で「市民と一緒にプロセスから考える」手法によって地方創生「まち・ひと・しごと・創生総合戦略」では全国一早く計画策定を終えたとして評価を得ています。それは、市民との対話を通じて最初から市民と一緒にやったと言うことで、国が進める「産官学金労言」でやりなさいとした指示と同じだったと言うものです。

時の石破大臣は「国より早くやっている！」と褒めてくれましたが、そもそも国の役人にこの趣旨がわかっているか疑問です。その後出てきた「１億総活躍社会」そして「働き方改革」も同じですが、主役は誰なのかです。

主役は国民です。主役が「学んで、気づいて、共感して」・・ そのプロセスを一緒に持ってこそ国民のやる気が出て、更には国を支える国民が出てくるはずです。今のままでは「ぶら下がり続ける国民」が増産されかねません。牧之原市がやってきたように「最初から一緒にやる」このパートナーシップをお互いに持つことができるかが鍵になります。

パートナーシップは対話による信頼関係が前提です。それがあって更に寄り添った対話ができて双方の課題解決や夢の実現に繋がっていくはずです。牧之原市の「対話によるまちづくり」は全国に広がっています。

聴いてあげることの大切さ

市は、法律や条例に基づいて、市民税、固定資産税、国保税、水道料金や給食費まで様々な税金や費用を徴収します。しかし、収入がなくて生活が苦しいと払えない場合があります。そんな方には、延納や生活保護といったセーフティーネットがありますが、それでも様々な問題やトラブルが起こることがあります。

ある時市民生活部の担当から秘書に「窓口で市長を出せと叫んでいる方がいますが」と連絡が来ました。普通の市役所でも会社でもそうですが、そんな方が来ても窓口の担当者や課長が対応してトップまでつなぐことはまずありません。むしろつなぐことでその課長や上司の部長の能力が「そんなことも対応できないのか！」と低く見られます。ところが来た市民は、益々逆上します。私はそんな状況の時「私に１時間の余裕の時間があればお話を聴きます

次ページへ続く▼

SHIEN学と私の出会い
（シリーズ２）

▼前ページより続く

よ！」と受け入れていました。

ある時やはり窓口で大騒ぎなっていました。税金の滞納が続き差し押さえに職員が出向いた時の対応が悪かったと言うものでした。担当の職員からはおおよその経緯を聞いたうえで記録の秘書課の職員だけの市長応接室で待っています。

そうするとカンカンになった市民が、それでも市長室へはいるので少し控えめに入ってきました。しかし入るなり「聴いてくれ！ひどすぎる」と差し押さえの際の職員の態度を非難しました。

傾聴と言ってカウンセリングでは常道ですが、私はうんうんと言って頷いて同調しながら聞き続けます。「そう，そう、つらかったですね」「ごめんなさいね。つらかったですね」そうこうしているうちにだんだん話の内容が移って行きます。

「俺だって税金を払わないって言ってるわけじゃない。昔は景気良かったんだが、・・」そこで私が質問をします。「何されてたんですか？」「そうですか？それで？」と質問を繰り返していくと話すんですね。だって聴いていてくれるんですから。そして３０分もたつと「わかってくれりゃあいいんだ。」と言いながら窓口の職員については「あんなやつはだめだ！」と否定する態度は変わらない。でも怒りは収まっている。４５分したら「市長がわかってくれりゃあ、まあ良いにしておく」くらいになって気分爽快に市長室を後にします。ほとんどこの後苦情はここまで来ません。市長以上に訴えを聴いてくれる人がいないし、当人の心の整理はついているからです。

人は「受けとめて聴いてあげる」それだけで幸せになるものです。しかし、行政は公平公正に市民生活を進めなくてはならないですから、窓口では残念ながら「聴いてあげる」ことができにくいことはやむを得ません。でもそんな気持ちを職員が持つことが大切だろうと思っています。

SHIEN学との出会い

私とSHIEN学との出会いは、５年ほど前の静岡市内でのシンポジウムで、静岡大学の舘岡康雄先生との出会いでした。シンポジウムの基調講演で舘岡先生は「マネジメントとは！」と言う問いを立てました。マネジメントとは「自らやる気が起こる場を創ること」これが正解のようでした。講演の後のパネルディスカッションで一緒になった私たちは、おたがいの経歴と考えを話し合ううちに「同じことをやってきて、同じことを言っている！」と理解し合いました。

SHIEN学では「お互いに助け合うためには」悩みを自然に相手に伝え、その中から自ら答えを出していきます。誰かから「そうやりなさい！」と命令されるのではなくて、「そうだ！」と自ら気づいて行動するのです。舘岡先生は、日産出身で、ゴーンさんが来る前の最悪の時代から立ち直るまでの社員の気持ちの変化を「日産ウェイ」として形にしました。これを英語で表現したものが「The Power comes from inside!」ですが、この取り組みを全社員がやることによって会社が建て直っていったと言うものです。ゴーンさんの力もあったでしょうが、一人ひとりがやる気を出したからだと言います。牧之原市の「市民協働」なども「人は誰でも主役になれる！」がキーワードです。

一人ひとりがやる気をもてるようになって欲しい。やる気をもてるようにするためには「学んで」「気づいて」「共感して」のプロセスが欠かせません。このプロセスが、気軽に話し合える、聴き合える安心した空間、つまり対話の場であります。

舘岡先生と私はお互いが連携することを確認した後に舘岡先生が創立した「一般社団法人SHIENアカデミー静岡」に参加しました。私は市長でしたので、SHIEN学との直接の事業はありませんでしたが、いくつかの事業では舘岡先生に牧之原市に来ていただき講演をお願いしました。

※次号では、どのような行政課題をSHIENを通じて解決に向けて尽力されたのかお話しいただきます。